

の念を抱かなかつたとしたら、天下は永遠に泰平であるべきであつた。然るに盲目でも死んでも居ない弱者は矢張り一度は眠りから覺める時が来て眼覚めるのである。社會組織の缺陷が彼等の上に災ひして居る事を悟つた彼等は、毅然として強者に對抗し、その正當の権利を主張し相争ふ事となる。斯くて労働問題は現實の問題となるのである。

▲我國における労働問題

上述の如く弱者の自覺なくして労働問題が成立したずとすれば、封建時代の迷夢尚覺めやらすして『長いものには巻かれよ』『泣く子も福には勝たれぬ』との諺にも觀念の下に當然主張すべき自由、權利をも尊重して厭がない労働者の多い我國には畢竟勞働問題の有するや否やさへ疑問となるのである。或人は我國には温情拂すべき主従關係が存在するから、労働問題などは到底問題とはならないと言つてゐる。從來の主従關係が永久に存續するものとしたら、成るほど労働問題は起らないかも知れない。併し科學の進歩、信用經濟の發達に伴ひ大工場組織の工業は現實に續々として起つゝあるではないか。十八二十人の雇人ならば兎も角幾百人、幾千人といふ工場労働者、夫れも水の低きに流るゝ如く賃銀の少しでも多い方へ必ず轉々として行く労働者と、一分間でも労働者を餘計に使用して一厘でも多くの利益を收めて配當金や賞與金を多くしやうと試みる資